

昔むかし、道に、いっぴきの悪いへびが住んでいて、いつもそこを通る人にかみついています。

あるとき、ひとりの聖者が通りかかりました。へびは、聖者に飛びかかってかみつきました。聖者は、おだやかにへびを見つめていいました。

「おまえはわたしをかみたいのだね。さあ、もっとかみなさい」

へびは、おどろき、聖者のやさしさに心を打たれました。聖者は、いいました。

「友よ、聞きなさい。これからはだれもかまないと、わたしに約束しないかね」

へびは承知して頭を下げました。聖者は行ってしまい、へびは罪を犯さないで暮らし始めました。

まもなく、人びとは、へびがかみつかなかったことに気付きました。すると、男の子たちが、へびをいじめ始めました。へびに石をばらばら投げつけたり、しっぽを持って引っ張り回したりしました。それでもへびは、決してかみつかず、聖者との約束を守り続けました。

ある日、聖者がやって来て、たまたまへびがいじめられているのを見ました。たたかれてけがをしている様子に、聖者は心を痛めて、

「いったいどうしたのか」とたずねました。へびは、

「おお、お師匠さま。あなたは、わたしに、だれもかんではいけないとおっしゃいました。けれども、みんなはわたしに、とてもひどいことをします」といいました。聖者はいいました。

「ああ、わたしはおまえに、だれもかんではいけないとはいった。でも、シューシューいってはいけないとは、いわなかったぞ！」

原話：『インドの民話』A・K・ラーマージュジャン編／中島健訳／青土社  
再話：村上郁